

## 北海道の畜産業の父

### エドウィン・ダン

北海道は、生乳生産

量が全国の約五十%、  
肉用牛頭数が約二十%  
を占めるなど、全国一  
の畜産王国です。

江戸時代が終わり、  
「明治維新」という大

きな時代の転換期に、

現在の北海道の畜産業の礎を築いた人物こそ、アメリカ  
から農業指導者として来日したエドウィン・ダンなのです。

一八六九年、日本政府は、北海道に「開拓使」という役  
所を置き、大規模な開拓経営を始めました。

しかし、日本の中でも冷涼な気候の北海道で、本州の  
農業技術を使い開拓を進めることは難しく、開拓使は、欧  
米の優れた農業技術を導入するため、様々な外国人指導者  
を雇いました。その中の一人が、エドウィン・ダンです。

ダンは、一八四八年にアメリカのオハイオ州で生まれま



〔新冠町郷土資料館蔵〕

した。家は大きな牧場を経営しており、小さいころからア  
メリカの大規模な農業技術を学びながら育ちました。大学  
を一年で中退したダンは、家の牧場を手伝うなかで、経営  
についての実地の知識を得ました。

ダンは、日本に渡るようになったのは、二十五歳の時でした。

外国人指導者の中心人物で、後に「北海道開拓の父」と呼  
ばれるアメリカ人、ホーレス・ケプロンの息子エー・シー・  
ケプロンが、日本で飼育する肉牛の買い付けと、農業指導  
者の発掘のために、ダンの牧場を訪れました。

そこで、ケプロンは、畜産業を熟知し、情熱あふれる農  
業家の青年ダンを見出し、日本政府が探し求めていた農業  
指導者として、日本に渡ることを要請しました。

ダンは、二十五歳の青年でしたが、「まだ開拓が進ん  
でいない北海道の農業の発展のために、自分の力を発揮  
してみよう」と日本に渡ることを決意し、この要請を  
受けました。ダンは、四十頭の牛、九十一頭の綿羊を貨  
物列車に乗せ、アメリカから日本に渡りました。旅客機  
がまだなかった時代、列車や船を乗り継ぎながら約二  
か月近くかけて、ようやく日本にやって来ることがで  
きました。

ダンは、はじめに東京で、北海道に渡る若者の農業指導を担当することになりました。この若者達は、もともと士族出身であったため、農業については、ほとんど初心者ばかりでした。ダンは、環境が違う日本に来て、並々ならぬ熱意をもち、多くの若者に農具の使い方から耕地の整備、収穫や農作物の選別の方法など、アメリカ式の農業を手とり足とり教え、周囲の人々や日本政府からの信頼を高めていきました。

そして、一八七五年、北海道の開拓事業が着々と進む中、ダンの知識と技術、情熱が北海道で生かされる時がきました。

\*ダンは、まず、函館の近くにある七重（現在の七飯町）の官園に赴任し、東京の家畜を移すなどして、北海道で畜産業を始めるための整備を行いました。

また、札幌の牧場経営のため、畜舎などの設計、各種農具の調整、作物の種子の購入などを行うことに加え、その他の農業の指導監督を務めるなど、北海道の開拓を精力的に進めました。

この間、開拓使が新冠に開設した牧場を視察し、牧場管理の計画を立てたり、北海道で家畜を飼育するために必要な助言を行ったりもしました。

そのため、ダンは、札幌から新冠まで二百キロメートル以上ある道のりを何度も行き来しなければなりません。当時の北海道は、開拓使による開拓が進められていたものの、ほとんどが原始林で野生生物が住む未開の地でした。往復の道中は、危険と隣り合わせの毎日が続く大変厳しいものでした。

通常、開拓使に雇われた外国人指導者がダンのように出張する場合、十分な額の費用が支給され、さらに調理師や給仕、通訳が同行するなど、まるで江戸時代の大名行列のように手厚い待遇で行われました。

しかし、ダンは、このように外国人指導者が特別扱いされることを嫌いました。質素に暮らす日本人と同じだけの費用を受け取り、必要最小限の持ち物だけを携え、道案内をするたった一人のアイヌの人とともに、



「新冠でバッタの被害を調査するダン」  
〔エドウィン・ダン記念館蔵〕

馬で札幌と新冠を往復し、北海道に農業を根付かせるために力を尽くしました。

一八八七年、馬を改良するために改組された新冠牧馬場の整備は、幾多の災害に見舞われ、大変、困難な作業になりました。

ある時は、十勝地方に大量発生したバッタが、牧場に飛来し、馬の飼料のためにつくっていた畑の作物や牧草のほとんどを食い尽くし、牧場に大変な被害をもたらしたこともありました。

さらに、野生のエゾオオカミが牧場の馬を襲い出したこともありました。エゾオオカミは元来、野生のシカを主として捕食していましたが、そのシカが少なくなったことから、良質な馬が集まる新冠牧馬場を標的にし、食い荒らすようになったのです。ダンが日本に渡って四年あまりが経ち、苦労を重ね、広大な土地や冷涼な気候を利用して、ようやく馬の生産、改良に成果を出しつつあったころだったので、新冠牧馬場の惨状に、ダンは絶句しました。

ダンは、この時を振り返り、後にこう語っています。

「われわれの馬の生産を上回る速度で馬をどんどんむさぼり食ってしまうオオカミの勢力があることを発見して、愕然

とした。子馬を連れられた雌馬の家族を一つの区画に入れて放牧していたところ、一週間か十日もたたないうちに、子馬は一頭もいなくなった。九十頭の子馬が一頭残らず殺されており、その骨が散らばっていた。」

しかし、ダンは、ただ手をこまねいてはいませんでした。「ここであきらめてなるものか」と知恵を絞り、動物駆除用の毒薬である「ストリキニーネ」を大量に買い、さらに故郷のアメリカからも追加注文しました。ダンは、肉に仕込ませた毒薬を使って、牧場からオオカミを一掃することにしました。

ダンとともに新冠牧場の発展に努め、後に新冠町の名誉町民となった浅川義一さんは、

「ダンという人は優しかったのですなあ。ダンは、馬の繁殖のためにエゾオオカミを皆殺しにするのもやむを得ないと考え、苦渋の決断をして毒殺作戦をやりました。でも、ダンは、植物を育て、家畜を増やしていた人でしたから、生き物たちの命を大切にするという心は強かったとみえましてね。エゾオオカミたちの死体を集めてお墓を造り、葬ってやったそうです。」

と話しています。

このような困難を乗り越えて、北海道の畜産業のために尽力するダンは、周りの人からの信頼を集め、ダンとダンに協力した北海道の人々の手によって、北海道に畜産業が根付いていきました。

ダンは、一八八二年に開拓使が廃止になるまで、乳肉牛・種馬等の生産、バター・チーズ等の酪農加工の指導、麦・じゃがいも等の耕作の提唱など、北海道の開拓に尽力しました。

その後、東京へ戻ってからアメリカに一時帰国しましたが、日本での仕事を通して日本の環境や文化に慣れ親しんだダンは、<sup>\*</sup>駐日公使として再び来日しました。その後、新潟県で石油事業をおこし、石油会社の設立や精油所の建設を行いました。さらに、その手腕が認められ、<sup>\*</sup>三菱財閥へ迎えられると会社の発展に貢献しました。

一九三一年、ダンは、東京の代々木にあった自宅で八十歳の生涯を終えました。

北海道農業の根幹を担う畜産業。現在の北海道の農業や私たちの生活は、ダンが伝えた多くの農業技術と、ダンの開拓精神によって支えられています。

一八四八	アメリカオハイオ州で生まれる
一八七三	開拓使御雇外国人として来日、東京で牧場の運営と生徒の教育に従事(二十五歳)
一八七五	北海道に出張、四か月間、農業指導を行う(二十七歳)
一八七六	本格的に北海道の農業指導を開始、北海道の畜産業の基礎づくりに貢献(二十八歳)
一八七七	新冠牧馬場に赴任し、主に馬を取り扱う牧場指導を始める(二十九歳)
一八八二	農業指導の役割を終え、東京に移る(三十四歳)
	その後、駐日公使を務めるとともに、新潟県で石油会社をおこすなどして活躍
一九三一	東京で死去する(八十三歳)

\*開拓使：明治時代、北海道の開拓のために設けられた行政機関

\*官園：開拓使が北海道に設置した農業試験機関

\*駐日公使：日本に駐在する外交官

\*財閥：明治時代の巨大な独占企業集団